遺伝病学分野（遺伝科）が経験した東日本大震災

分野：遺伝病学分野（遺伝科）
教授：松原洋一
場所：医学部３号館３階
連絡先（メールアドレス）：ymats@med.tohoku.ac.jp

遺伝病学分野のほとんどのメンバーは、医学部３号館３階にある医局と実験室で震災を経験した。それまで誰も経験したことがないような強く長い揺れがおさまった後、私たちはすぐそばの避難路から館外へ避難しようとした。しかし、病院外来棟への連絡通路にある扉は廊下の天井から落下したアルミ板にさえぎられて開くことができなかった。そこで粉じんで曇っている３号館内の廊下と階段から下へ降り、ようやく館外へ避難することができた。幸いにも怪我人は出なかった。

しばらくしたのち、研究室へ戻り床一面に散乱した資料、実験器具、大きく移動した実験機器などの惨状を目の当たりにすることになった（写真参照）。また３号館と外来棟へのブリッジ部分にまたがって位置する遺伝カウンセリング室は、建物の境目にあたる天井と壁の金属板が落下し、さらにその隙間から大小のコンクリートの破片が部屋に散乱していた。普段遺伝科のスタッフや患者さんが座る椅子の上にも大きなコンクリート塊が落ちていた。もしその時間帯が外来だったとしたら、大きな人的被害が出ていたかもしれない。その後、文部科学省をはじめとする中央からの視察団が来る際には、この遺伝カウンセリング室が定番の見学コースに組み込まれていたようである。

遺伝科は入院病棟がなく外来患者さんもいなかったため、遺伝科としての診療面での緊急対応は必要ないと判断し、小児科病棟へ応援のために駆けつけた。しかしながら、免震構造を持つ新病棟の低層階にある小児科病棟は揺れも少なく、電源・水道にも影響がなかったためか、病棟のスタッフは大地震であるという感覚が乏しい印象であった。私たちが手伝うことは何もないと伝えられ、拍子抜けした。しかし、その後は深刻な事態に直面することになる。

遺伝科の診療支援

３号館が立ち入り禁止となったため、当面の間、遺伝科の全員は小児科病棟のＳＧＴ室に小児科スタッフと共に陣取り、小児科としての診療支援をおこなった。大学院生を中心に、小児科病棟の診療を支援するほか、仙台市急患センターでの診療、石巻赤十字病院への応援、仙南中核病院への応援など休む暇もなく活動を行った。また秘書／事務補佐員や技術補佐員は、小児科病棟で働く人たちのために炊きだしをして日々の食事を用意するとともに、手分けして市内各所へ出かけて食料品や日用品の買い出しを行った。

研究室での被害

遺伝病学分野は３号館の低層階に位置するためか、大型機器の落下や損傷は免れた。しかしながら、長く続いた停電のために、超低温冷凍庫に保管されていた長年にわたる貴重な研究試料はほぼ全滅してしまった。液体窒素に保管されていた細胞株は生き残った。今後の災害に備えた検体保管に大きな教訓を残すことになった。

津波被災病院での経験

遺伝病学分野のスタッフの一人は、震災発生時、東松島市にある真壁病院で小児科外来診療をおこなっていた。ちょうど午後３時までの外来であったため、急いで大学病院に車で向かった。三陸道が通行止めとなったため、山側の一般道を通り数時間かかって仙台へと戻った。実はその間に、津波は海岸からかなり離れた真壁病院まで到達し、駐車場の車は全滅していた。また、この時、仙台まで海側の一般道を通っていたとしたらおそらく車ごと津波で流されていたと思われる。生死の境目はほんの偶然に紙一重で決まったといえよう。幸いにも真壁病院で勤務中の方々は無事であった。

２０１３年７月現在の遺伝病学分野／遺伝科の現状

研究活動は震災前と同様のレベルに戻っている。３号館の全面改修が 2013 年の春から行われるため、そこから１年間プレハブ生活をしたのちに今と同じ場所に戻ってくる予定となっている。診療活動については、遺伝カウンセリング室がいまだ危険で使用不能のため、小児科外来の空きスペースと時間帯を借りて遺伝外来を開いている。こちらの診療スペースは再開の目途が立っておらず、遺伝科の診療活動はいまだ復興途上にある。

●遺伝病学分野のメンバー（カッコ内は震災後の新しいメンバー）

教員／スタッフ：松原洋一、青木洋子、新堀哲也、苅部明彦、（井上晋一）

大学院生：小松崎匠子、阿部裕、斉藤由佳、（井泉瑠美子、矢尾板全子、守谷充司）

秘書／事務補佐員：菅原道子、芳賀洋子

技術補佐員：加藤久美、館田葉子、高橋吏世

遺伝カウンセラー：（飯倉立夏）

＜文責：松原洋一＞

遺伝病学分野の医局と実験室

遺伝科外来（遺伝カウンセリング室）

医学部３号館の外壁と廊下